

ACCESSIBLE DESIGN

The Periodical of

アクセシブルデザインの総合情報誌 インクル No. 74

2011 (平成23) 年9月25日

No. 74

"Incl." by The Accessible Design Foundation of Japan (The Kyoyo-Hin Foundation)
共生社会の実現を願う妖精「インクル」。[包括的教育理念]を意味する英語「インクルージョン」から名付けました。

目次 / contents

■ <特集>包装容器 包装・容器の高齢者・障害者等配慮設計指針 国際規格として制定 (酒井光彦).....	2
■ パッケージコンテスト.....	4
■ 「JIS S 0025 高齢者・障害者配慮設計指針—包装・容器—危険の凸警告表示— 要求事項」改正 (伊名田利秀).....	5
■ 第12回法人賛助会員活動報告会 「より多くの人々が暮らしやすい社会に向けて」(星川安之).....	6
■ 2011インターンシップin共用品 インターンシップを通じて、7人の高校生の心に芽生えたものとは (森川美和).....	8
■ 「第38回国際福祉機器展 H.C.R.2011」開催.....	10
■ <随想 私と共用品> 第52回 スマホの点字式IPITSU入力を健常者も使うユニバーサルデザインの 文字入力に (長谷川貞夫).....	11
■ 「人間中心デザインガイドライン」合同ワークショップ開催 人間工学に基づく製品・サービスのデザインに関する団体が 一堂に会し、議論 (倉片憲治).....	12
■ <ニュース&トピックス> JISハンドブック2011年度版 共用品・ADの最新の規格が集結したハンドブック 発行 ISO (国際標準化機構)の最近の動向について (松岡光一).....	13
■ <キーワードで考える共用品講座> 第69講 共用品という思想(その4:共用品を創るための5つの要素[その3]) (後藤芳一).....	14
■ <事務局長だより> 共用品の開発に必要な忍耐とコミュニケーション力 再度学生から学ぶ (星川安之) 共用品通信.....	15
■ <わが社のエース> 日本福祉大学 障害学生支援センター 支援を必要とする学生とそれを支える学生をサポート (金丸淳子) 奥付.....	16



■ 「コミュニケーション支援用絵記号デザイン原則 (JIS T 0103)」に収録されている絵記号例。左から「食
事・洋食」「食べる」「幸せ」(共用品推進機構ホームページから無償ダウンロードできます)

財団法人 共用品推進機構

<特集>包装容器

包装・容器の高齢者・障害者等配慮設計指針 国際規格として制定

2000年、日本工業規格 (JIS S 0021) として制定された「高齢者・障害者配慮設計指針—包装・容器」が、2011年7月、国際標準化機構 (ISO) より、ISO 11156 Packaging-Accessible design-General requirementsとして発行された。今回は、発行に至るまでの経緯を含めて報告する。

日本のJIS、国際規格に

この規格は、我が国の提案でISOのTC122 (包装・容器に関する技術委員会) に新たにワーキンググループ (WG) が設置され、3年間で6回の国際会議を経て制定されたものである。議長は、日本女子大学の佐川賢教授、事務局は社団法人日本包装技術協会が務めた。

制定された規格には、包装・容器が、高齢者及び障害のある人達でも安全で使いやすくなるための一般的な通則が書かれている。具体的には、「同じ形で中身が異なる容器を、目の不自由な人が識別できるようにする」、「力が弱い人でも開封しやすくする、廃棄しやすくする」などの工夫が主な項目であり、ほぼ日本のJISで規定された項目が採用された形となっている。

また、附属書には日本で実施されている数多くの事例がイラストで紹介されている。「ジュース等の紙パックと手触りで識別するために付けられている牛乳の紙パック上部にある半円の切り欠き」、「リンス容器と触って識別できる側面とポンプ上部にギザギザのつ

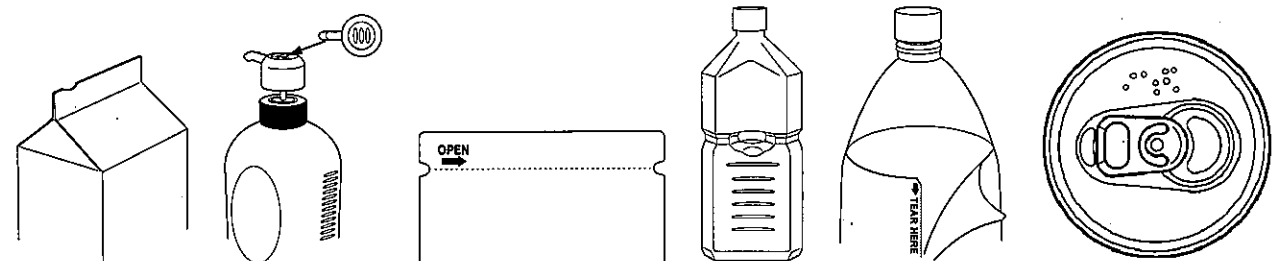
(社団法人日本包装技術協会 専務理事 酒井光彦^{さかいみつひこ})

いたシャンプー容器」、「小さな半円の凹みが付き開け口が触って分かり開けやすい容器」、「中央部に凹みがある持ちやすいペットボトル」、「廃棄する時ラベルを取りやすくするための切り込みと切り取り線が付いているペットボトル」、「上部に点字表示があるアルコール缶」などである。

これらは、まさに日本の企業が高齢者や障害のある人たちのニーズを受けとめ工夫し実践してきたものばかりである。

不便さ調査

1993年、今から18年前社会福祉法人日本点字図書館と共用品推進機構の前身E&Cプロジェクトは、目の不自由な人達に向けた不便さ調査を行った。その時、包装・容器に関して識別しづらい製品として下記の製品が不便だとあげられた。1. シャンプーリンス 2. 缶詰食品 3. 調味料 4. 箱、袋、パック入り食品 5. 缶、瓶、紙パック飲料 6. 化粧品、整髪料 7. 洗剤、仕上げ材 8. レコード、テープ、CD 9. 瓶詰食品 10. 薬



■左から牛乳パックの切り欠き、シャンプーのギザギザ、開封位置を示すための凹み、凹みのあるペットボトル、はがしやすいラベル、アルコール缶の点字

各社の工夫拡がる

1991年10月、花王がはじめてシャンプー容器側面にギザギザをつけ、翌年から同業他社に同じ工夫が拡がった。これは、ギザギザに対する実用新案を取得した同社が、この工夫を他社に無償で提供したことで、20年たった今では日本のほぼ全てのシャンプーにギザギザが付くようになった。

1995年、宝酒造が、缶チューハイの上部に点字で「おさけ」と表示し翌年から各社が採用、1996年からは缶ビールにも拡がった。

牛乳パックの切り欠きは、1997年に宅配通販「らでいっしゅぼーや」が始め、2001年12月から全ての牛乳メーカーが採用するに至っている。その他にもアルミホイルと識別するために家庭用ラップの包装・容器側面に付けたWの凸表示など、多くの包装・容器が、貴重な配慮を行ってきた。

2000年、JISの制定

包装・容器における工夫は、一企業、一業界だけで行うのではなく、多くの企業、業界で同じ工夫をすることによって、消費者にとってはより利便性が増す。

JISを統括する日本工業標準調査 (JISC) は、企業の努力を文書化し広く誰もが読めて理解できるように包装・容器を、高齢者・障害のある人達が使いやすくなるためのJISを作ることを考え作業にとりかかった。障害当事者団体を含む消費者団体、業界団体、学識経験者で組織された委員会が設置され多くの議論を重ね、2000年、「JIS S 0021 高齢者・障害者配慮設計指針—包装・容器」として制定された。

JIS制定の影響は大きく、その後日本では点字表示されたケチャップ、ソース、ジャムなど、配慮された多くの包装容器が世の中に出回るようになった。

国際規格への準備期間

日本国内でその配慮が拡がっていった包装容器であるが、これらの工夫の多くは国内だけでなく国際的にも広げる必要があると考え、日本包装技術協会は日本工業標準調査会と検討を重ねた。その結果、まずはお隣の国、韓国、中国と意見交換を行い、両国の合意が得られたら国際規格に3カ国共同で提案する計画をたてた。2002年～2005年まで3カ国で議論が行われた。下記は、2002年から3カ国で議論した経過である。

2002年11月 日本 (JSA 日本規格協会)、中国 (CAS 中国標準化協会)、韓国 (KSA 韓国規格協会) の3カ国による第1回東北亜標準化セミナーが韓国で開催され、国際標準化活動での協力と役割について協議された。

2003年8月 経済産業省、共用品推進機構、財団法人日本規格協会、日本包装技術協会が韓国【韓国規格協会 (KSA)、工業標準部 (KATS)、産業資源部 (MOCI)、韓国包装技術士会】を訪問、高齢者・障害者配慮に関する標準化ビジョンと日本での取り組みを紹介した。

2003年10月 経済産業省、共用品推進機構、日本規格協会、日本包装技術協会が中国【中国包装技術協会 (CPA)、中国標準化研究院 (CNIS)、中国標準化協会 (CAS)、中国国家標準化管理委員会 (SAC)】を訪問し、アクセシブルデザインについて紹介した。

2003年11月 第2回東北亜標準化セミナーが開催され、日本、中国、韓国の3カ国の政府代表者の間で高齢者・障害者配慮の規格作成委員会の設置が合意された。高齢者・障害者にも分かりやすく使いやすい「アクセシブルデザイン」の商品・サービスのための統一規格づくりに合意し、3カ国共通の指針をまとめ、最終的に国際標準として普及を目指すことになった。

2004年5月 経済産業省、共用品推進機構、日本規格協会、日本包装技術協会が参加して、最初の日中韓ミーティングを韓国で開催し、JIS化されている凸記号、プリペイドカード、報知音、包装・容器等の5項目を提案説明した。

2005年 日本提案規格を共通規格として、日中韓3カ国共同でISOへ新業務項目提案(NWIP)に合意した。

日本から高齢者・障害者配慮設計指針を、国際規格に提案するのははじめてであったため、3年の年月を費やしたが、中国、韓国の多大な協力を得ることができたことは大変大きな成果であった。

国際提案へ

日本、中国、韓国で共同提案する包装・容器に関するJISは、2006年10月にアメリカのアトランタで開催されたISO/TC122(包装容器技術委員会)の総会で、日本包装技術協会より紹介し、各国の参加者からは好意的に受け止められた。しかし、2007年4月、投票では積極的に参加する国が中国、韓国、ヨルダン、アメリカ、日本と、承認される5カ国ギリギリの結果となった。その背景には、ヨーロッパで既に同じテーマで活動していた

ことがある。

そのため、2007年~2008年にかけては、ヨーロッパの会議に参加し、同分野はヨーロッパだけで行うのではなく、ISOの場で議論を進めることの意義を唱えた結果、日本で行ってきた意義を理解してもらうことができ、次の段階にすすむことができた。

その後、ヨーロッパ各国の協力を得ることができ、2008年4月第1回のワーキンググループを開催した。日本(2008年10月)、アメリカ(2009年5月)、スウェーデン(2010年1月)、中国(2010年11月)と会議を重ね、今回の国際規格制定に至った。

この規格が制定されたことにより、多くの国のシャンプーの側面にギザギザ等がつくことも夢ではなくなったのである。

すぐに次の課題へ

TC122では、すぐに次の課題が待ち構えている。日本からは、「開封のしやすさ」というテーマを新たに提案している。また、ヨーロッパからは、医薬品容器への点字表示の標準化が提案され、これもまた日本が議長を務め検討することになっており、第二幕は既に上がっている。

パッケージングコンテスト

日本包装技術協会では、20年程前から毎年「日本パッケージングコンテスト」を行い、毎年各部門ごとに優秀な包装・容器の表彰を行っている。

2年前から、「アクセシブルデザイン賞」を設け、高齢者・障害者等へ配慮された製品

を表彰している。今年は、日本クラウンコルクのスムーズプルヒンジキャップ、J-オイ

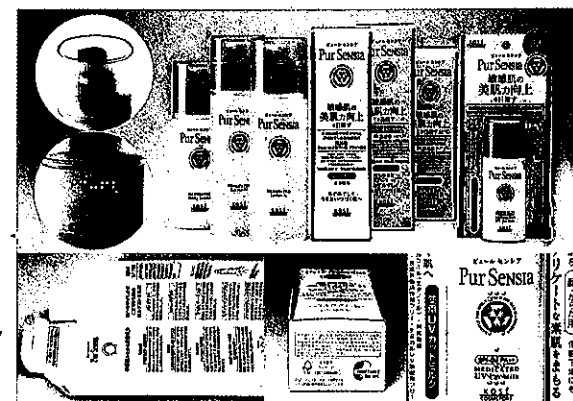


■左から 32スムーズプルヒンジEU4-TE、UD BIB 8kg及び15kg、ジスロマックSR成人用ドライシロップ2gの瓶ラベル

ルミルズの箱に入った液体の注ぎ易さの改善のための手穴を付与したUD BIB、ファイザーのジスロマック瓶ラベルが表彰された。

また、本年度より共用品推進機構理事長賞を新たに設けた。栄えある初年度の受賞は、容器・ケースに点字を付与したコーセーコスメポートの化粧品「ピュールセンシア」であった。

標準化と共に、その工夫や配慮を広げていくことも重要な仕事と思っている。



■ピュールセンシア

「JIS S 0025 高齢者・障害者配慮設計指針—包装・容器—危険の凸警告表示—要求事項」改正

伊名田 利秀 (社団法人日本包装技術協会 包装技術研究所 包装システム研究室室長)

今回改正された規格は、ISO 11683:1997を基に、2004年にJISとして制定され、視覚機能が低下した高齢者・障害者が、危険物が入っている包装・容器を触覚で確認するために、包装・容器表面に三角形などの凸警告記号を表示することを規定したものである。高齢者・障害者が日常での自立及び生活の質を高めるために、今回、国内実情に合わせた改正を行い、2011年5月に規格書が発行された。以下、改正ポイントの概要を説明する。

1. 適用範囲
改正前の適用範囲では、法規で定められた危険な物質及び調整物を入れた包装のうち、日常生活で人が直接接触するものを対象として書かれている。今回の改正で、上記に加え「薬事法の対象となる製品のうち、誤使用、誤飲食によって危険が及ぶ可能性が高い製品(家庭用殺虫剤、家屋を守るための殺虫剤、殺そ剤及びき避剤)だけに適用する。」とした。
2. 危険の凸警告表示記号の形状及び寸法
国内の現状とこれからの普及・推進に向けて、通常サイズ及び縮小サイズの一部の寸法を変更した。
3. 危険の凸警告表示の位置
一般的な場合において、改正前の規格では「危険の凸警告表示の記号は、正三角形の頂点が包装の底面から50mm以内になるように、縁端に近い直立した取扱表面に表示する。」と規定していたが、実際の包装・容器は多様な形態・デザインの製品があり、更に、分かりやすく表示するとの必要性から、「使用す

るときに最初に触れる位置及び必ず触れる認知しやすい位置にも表示することが望ましい。」という文言を追加した。

特殊な場合については「エアゾールの包装」、「全面開口するプラスチック包装(使用時)」以外は一般的な場合の表示を用いるよう記した。特にエアゾールに於いては、エアゾール包装を扱う一般消費者及び高齢者・障害者がより安全に使用できるように、「危険の凸警告表示は、貼付ラベルを貼り付けることによって実現してもよい。この場合、使用するとき最初に触れる、又は必ず触れる容器胴部の上部の認知しやすい位置に表示する。」と変更した。

代わりに
国内外での危険の凸警告表示の使用実績はまだまだ少ない。高齢者・障害者に配慮した包装・容器の実現と普及・推進に向けて、更なる関係者の協力を期待する。尚、実際に活用される場合は、規格書の本体・解説を良く閲覧いただき、ご理解を深めて頂けたら幸いである。

第12回法人賛助会員活動報告会

「より多くの方が暮らしやすい社会に向けて」

～大震災を経験し、今できること、これから取り組むべきこと～

財共用品推進機構の第12回法人賛助会員活動報告会を、7月11日（月）午後1時より、東京ドームホテル（東京都文京区）で行った。この報告会は、機構の前年度決算が承認された後に行っている会合で、設立以来毎年実施してきている。今年は、3月11日に起こった大震災により、多くの機関で多くの会合が延期や中止になっている中、機構として、報告会の実施の可否から議論をはじめた。行うのであればどのようなテーマで行うかを議論した。その結果、共用品・共用サービスが、この事態になにができるかを、法人賛助会員の方々と共に考えることが重要と考えた。テーマを、「より多くの方が暮らしやすい社会に向けて～大震災を経験し、今できること、これから取り組むべきこと～」とし、2名の方に講演をお願いした。

事務局の金丸 淳子より22年度の事業報告と、23年度の事業計画を、パワーポイントを使って説明した後、二人の講演となった。

東北関東大震災障害者救援本部の活動

一人は、自立生活センター「STEPえどがわ」の事務局長である今村 登さん。当日は、東北関東大震災障害者救援本部、広報担当の立場で「インクルーシブ社会を見据えた復興をめざして」と題して講演していただいた。同救援本部は、「ゆめ風基金」、「DPI日本会議」、「全国自立生活センター」が中心となり岩手県、宮城県、福島県ならびに3県を統括する「支援センター東北」を設立し、人的、資金的、物資等の支援活動を行っている。

同センターは、震災から2日後の13日にDPI日本会議の会長の呼びかけで緊急会議がもたれ、14日に設立されていた。その後、同本部は、募金活動、水、ガソリン、紙オムツをはじめとする物資の調達支援、並行して現地で安否の確認がとれていない障害者の捜索を行い、つながりはじめた。次の作業は、つながった障害者への個別支援。最初ライフラインであった物資から、簡易ベッド、洋服等の生活支援へと移っていった。更にボランティアの確保、疎開と次から次へと作業が続

く。今村さんは、現地の写真を紹介しながら、最後に復興は、元に戻す復興でなく、障害者を活用し、障害者の特性を参考にして、誰も排除しない新たな町づくりが必要であると伝えた。

東京ディズニーリゾート

続いて講演をいただいたのは、㈱オリエンタルランドCS推進部でバリアフリープロデューサーをされている野口 浩一さん。「東日本大震災での東京ディズニーリゾートのサービスと今後の課題」と題して、3月11日から12日にかけて、どのようにゲストを心身共に安全に守ったかは多くの人達の関心ごとであった。

普段からの防災訓練、非常食の蓄え、それに加え、日頃からのゲストに対するキャストの対応が、この状況になっても活かされたとの報告は、聞いている人達に感動を伝える話であった。特に、ゲストも一緒になってこの難関を少しの愚痴も言わずに乗り切ったことは、日頃からの積み重ね以外の何物でもない。



■左から、講演する今村氏、野口氏、杉山氏

視覚障害者の不便さ調査報告書

続いて、日本点字図書館の杉山雅章さんと、共用品推進機構の森川美和が、18年ぶりに行った「視覚障害者の不便さ調査」の結果報告を行った。

機構の前身であるE&Cプロジェクトが発足した1991年に企画された「視覚障害者の不便さ調査」は、その後社会を大きく変えることになった。

包装容器の識別が困難という声に各社が応え、シャンプー容器側面にギザギザが付き、牛乳パック容器上部に半円の切り欠きがついた。その配慮は、業界の基準となり、日本工業規格に発展、そしてついには国際規格（IS）へと発展していくことになる。

あれから18年、当時山のように出てきた不便さは解決され、調査結果報告でも、「便利さ」に変わったものが紹介された。コンビニエンスストアも、便利になったもののひとつである。また、電話の5番の凸点、缶アルコール上部の点字表示も便利になったとの答えが多く聞かれた。しかし、新たに不便さが出てきたものもある。

共用品は、不便さの指摘だけでなく、新たに作られていくものを全て「共用品」にするくらいの勢いが必要とも感じさせられる報告であった。

法人賛助会員の活動報告

今回も、多くの法人賛助会員の方々に集

まっていたことができ、最後のプログラムでは法人会員の方々からの活動報告をいただく貴重な時間をもつことができた。

新製品あり、リデザインした製品あり、より多くの人たちに読みやすいカタログあり、イベントの試みあり、アイデアコンテストの紹介ありと、とても充実した内容の時間となった。

入口には、1年間活動し形になったものを展示、紹介した。マニュアル、規格、書籍、などであるが、実は目に見えない形で多くの方々が、いろいろな成果を出して下さっている。市場規模は、調査開始年4,800億円だったところ、今回報告した2009年度は3兆4千億円と、約7倍に伸びている。この数字だけでも、とても多くの人達の力と努力が関わっていることが分かる。

来年に向けて

毎年、1年間の報告ができるのはこの活動に賛同し、様々な形で応援して下さる方々がいてくれるからと、法人報告会を行うたびに強く思う。

本年は、公益法人の移行を申請する年にもなる。機構は、公益財団法人をめざし今その準備にとりかかっている。信念をまげず、しかし、考え方は柔軟に、目標に向かって進んでいく覚悟を、またさせていただいた。

（星川安之）

2011インターンシップin共用品

インターンシップを通じて、7人の高校生の心に芽生えたものとは

今夏も共用品推進機構は高校生を対象としたインターンシップ(就業体験学習)を実施した。3日間の短い期間ではあるが、多くのことを考え学んだ高校生を生徒たちの感想を一部抜粋して紹介しながらお伝えしたい。(森川美和)

「東京未来塾」の高校生たち 科博イベントで子ども達と触れ合う

3日間の短いインターンシップのうち初日は、機構の事務局でイベントの準備や共用品の理解に努め、二日目と三日目は毎年恒例の国立科学博物館(東京都台東区)主催のイベント「夏休みサイエンススクエア」での共用品講座を機構の職員と担当した。

「夏休みサイエンススクエア」では、子ども達に共用品の工夫や障害のある人の不便などを伝えると共に、レーズライター(表面作図器)を使って目の不自由な人にも分かる「触って分かる絵」を作ってもらった。

共用品のイベントで得たこと 秋葉佳一

これまで私は、自分が健常者だから障害のある人の気持ちや立場になって考えることがあまりありませんでした。国立科学博物館でのイベントでは思っていた以上に人が来て大変でしたが、好評だったのでうれしかったです。また、子ども達に共用品を実際に触ってもらったり、注意深く見てもらったりした中で、共用品の配慮や工夫に興味を持ってくれたのではないかなと感じました。そして、これからは共用品の考え方がもっと広がっていくのではないかなと思いました。

イベントを通じて感じたこと 飯田未来

共用品と聞いて、今までは正直言ってよくわかりませんでした。けれども共用品とは、

わたしたちの生活の中にもものすごく溶け込んでいて、ほんの少しの工夫で多くの人に役にたっていると改めて実感しました。そして国立科学博物館での「触って分かる絵」では子ども達私たちが共用品についての説明を、真剣な眼差しで聞いていて共用品について多くの人に知れ渡ればいいなと感じました。みんながそれを知ったら、共用品をもっと多く作れるし、みんながさまざまな人を助け合えるのではないかなと思いました。私自身も多くの人に説明することで、逆により多くのことを学んだ貴重な体験でした。

共用品の役割 芹沢壮梧

共用品やバリアフリーは、高齢者や障害者のために作らなければならない、ということが言われます。その考えは果たして正しいのか。今回の学習を通して、私は一面的であると考えました。シャンプーの凹凸は、障害者や高齢者のために考案されたアイデアですが、健常者にも活用されました。

私たちの生活は、高齢者や障害者の方々の手でより住みやすい環境へと整えられていると言っても過言ではないと考えます。一見普遍性のない開発のように思える社会的弱者のための開発が全ての人たちにとって心強い手助けとなるという面を強調したいと思います。

最後に、私達は、便利なものが存在する社会の中で、ごく当たり前のように生きています。しかし、発展途上国ではそうはいきません。私は、非常に恵まれていることを、身に

染みて実感しました。共用品とは、私達の生活を豊かにすると共に、普段の生活の有難味を実感させてくれるものだと感じました。

共用品は人と人とのつながり 高倉祐樹

今まで共用品やユニバーサルデザインと聞くと、体の不自由な方や障害者のためだけの考え方と思い、どこことなく私には接点のないものだと思ってきました。しかし共用品の理念を教えて頂き感じたのは、体の不自由な人もさることながら男女の違いや左右の利き手の違い、身長の違いなど人それぞれ違う個性から生まれる差異にも配慮している事です。

自分の主観では快適であるものが実は、他の人の立場になって考えると思わぬ不便が生じることを知り、大変驚きました。実際にシャンプーとリンスを区別できるギザギザや、左利きの人や目が不自由な人のために四隅に数字を入れてなおかつ点字が打たれているトランプを手にとった時は、共用品の奥深さを痛感しました。

共用品は人と人とのつながりから生まれ、人と人とのつながりの中で進化し普及していくものだと思います。これから、共用品の精神が多くの人に伝わっていくように尽力を注いでいきたいです。



未来の共用品作りに向けて 田中瑞木

今回、共用品推進機構で体験学習をしたいと思った理由は、私の将来の夢が商品の企画

や開発をしてみたいというものだったからでした。みんなが使いやすいものをどのようにして知らせていくのか、どうやって考えていくのかを知り、将来の夢に活かせる部分があるといいなと思っていました。

体験初日に共用品の説明を受けて、私を感じた正直な感想は「そのような簡単な工夫でみんなが使いやすいものになるんだ!」というものでした。私の中では小さな工夫が見逃していた点のような気がします。身体に障害がある人が使いやすいもの、とだけ考えるのもっと大きな工夫がなければいけないという勝手な考えがあったからです。

「みんなが使いやすいもの」というのは障害がある人だけに向けたものではなく、私たちのような身体に不自由がない人にとっても使いやすいものである必要があることを忘れていました。3日間は本当にあっという間で、もっと体験していたかったと思います。

共用品の考え方 堤優里菜

共用品—それは体の不自由な人、お年寄り、障害者の方のためのものだとばかり思っていました。しかし、共用品は五体満足に生きている私、大勢の人々に対しても必要なものであり、大切な考え方だと身を持って学ぶことができました。

一般に、人に使いやすく・分かりやすくを追求していくと、最終的に誰でも使えるものに辿り着くのだと思います。駅の電光掲示板・アナウンス、段差を無くす、あるいは手で見る絵に関しても、決して体の不自由な人だけが生活でプラスになっているわけではないでしょう。五体満足の人々の生活の助けにもなっています。

共用品を考える際に、自分が生活のなかで気になる点から考えていくのも手だと気付きました。将来、「共用品」という名称をわざわざつけなくても、身の周りの物が当然に

「共用品」として使える世の中にしていきたいです。

共用品のあり方

李 吉隆

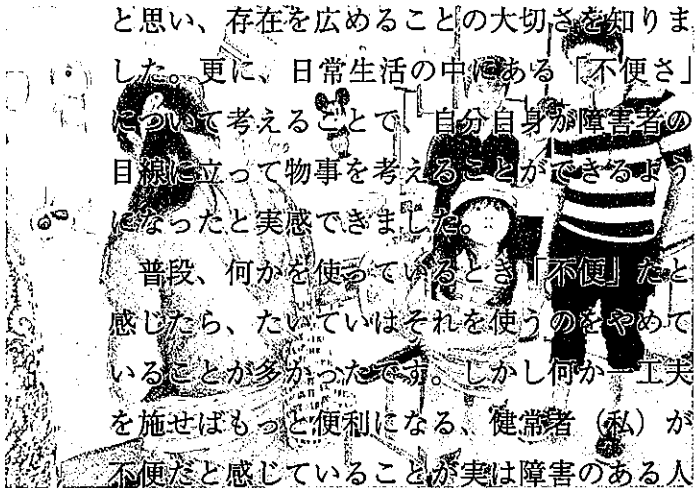
今回の体験を通して、「共用品のあり方」について知ることができました。私たちの身近なところでも共用品が活躍しており、また健常者だけでなく障害者も不自由なく使えるという点で、共用品はまさに「夢の便利器具」であると感じました。また「共用品を広めることの大切さ」を知りました。

共用品推進機構の取り組みのひとつでもある広告活動・推進活動に今回は参加させていただきましたが、そこで「まだ全ての人共用品の存在について知らない」という現状を知りました。もし、これらの人々に共用品の存在を知ってもらえることができたらどれだけ生活が今よりも、もっと快適になるだろうか

と思ひ、存在を広めることの大切さを知りました。更に、日常生活の中にある「不便さ」について考えることで、自分自身が障害者の目線に立って物事を考えることができるようになったと実感できました。

普段、何かを使っているとき「不便」と感じたら、たいていはそれを使うのをやめていることが多かったのです。しかし何か工夫を施せばもっと便利になる、健常者（私）が不便だと感じていることが実は障害のある人も不便に感じているのではないかと、それを利用して何か自分でもその人たちのために工夫を凝らすことはできるのではないかと、という思いが強くなったと今回の体験を通じて思いました。

将来は、共用品推進機構で学んだことも視野に入れ社会貢献活動をしていきたいと思えます。



「第38回国際福祉機器展H.C.R.2011」開催 共用品推進機構 本年も主催者企画コーナーに協力

国際福祉機器展H.C.R.2011は、50,000平方メートルの会場に約20,000点の福祉機器が展示され、今年は12万人を超える来場者数が予想されている。

国際福祉機器展ではハンドメイドの自助具から最先端技術を活用した福祉機器まで世界の福祉機器の展示の他、保健医療・福祉・介護の講座やセミナーなどが企画されている。

会期：2011年10月5日（水）～7日（金）10：00～17：00

会場：東京ビッグサイト 東展示ホール

入場：無料

主催：全国社会福祉協議会 保健福祉広報協会

問合せ：一般財団法人 保健福祉広報協会 <http://www.hcr.or.jp>

共用品推進機構は去年に引き続き、主催者が企画展示する「高齢者の生活支援用品コーナー」東6ホール特設会場Fで共用品の展示と講演行い協力する。

講演は10月5日（水）13：30～15：00

6日（木）10：30～12：00

7日（金）13：30～15：00

随想 第52回 私と共用品

スマホの点字式 IPPITSU（一筆）入力を健常者も使う ユニバーサルデザインの文字入力に

はせがわきだお
長谷川貞夫（社会福祉法人 桜雲会理事）

私は、77歳の視覚障害者です。60年以上用いて来た点字を、福祉のために利用するだけでなく、優れた符号の原理だから、ICT（情報通信技術）におけるユニバーサルデザインの文字として世界で使われることを望んでいます。

「スマホ」と呼ばれるスマートフォンは、視覚障害者には、指で分かる押しボタンもないバリアの装置とされています。これを逆転の発想で解決したいと考えました。点字の父ルイ・ブライユは、1825年に、現在世界の視覚障害者に使われている点字を発明しました。

一方、今のICT時代の原点は、モールスによる通信機の発明と考えます。このモールス通信の発明は、1837年でしたから、ブライユの発明の方が、12年早いことになります。

IPPITSUソフト

（タッチパネル点字一筆式入力）

点字は、触覚で分かる点の6点までの配列を、指で読み取る文字です。これに対し、モールス通信は、電気で伝えられる、いわゆる「トン ツー」の短・長の符号です。この符号の通信が発展し今のICT革命にまでなりました。私は、モールス通信の延長でもある今のスマホを、ブライユの点字と結び付けることを考えました。つまり、私には、スマホのツルツルの矩形の画面の枠が、点字のマスに見えるのです。こうして考えると、指で分かる押しボタンがなくても、画面の左上の角が1の点なら、他の三つの角の点も分かります。残る中段の2点は、左右の縦の枠の中ほどの内側になります。そして、この6点を1点ずつ書くのではなく、マス内の複数の点をつなげて一筆で書くようにしました。

点字の「う」は上の左右の角の内側の2点ですが、指を左上角の内側に当てて、そのまま指を離さずに右上角にまで一筆に引いて指を離すと、通常の文字の「う」が書けます。点字の「め」は6点の全部ですが、左上の角から、枠に沿って、画面を1周して6点目で指を離せば「め」が書けます。このようにして、点字の63種類の点のある符号をすべて一筆で書くのです。

これを実現したソフトが、IPPITSU（タッチパネル点字一筆式入力）(*)です。これで、ツルツルの画面で視覚障害者には全く手掛りがなかったスマホの世界に視覚障害者も入れる入口を作ったこととなります。それどころか、タッチパネルと呼ばれるツルツルの画面は視覚障害者のバリアでなく、ツルツルだからこそ、一筆書きができたのです。逆転の発想です。この入口の延長線上に、今の視覚障害者用音声パソコンのような便利さがあります。それは、これに続き開発されます。

また、ブライユ点字の延長の、この点字式一筆入力は便利だからこそ、世界の健常者を含めたユニバーサルデザインの文字入力の方法になることを強く望んでいます。

(*) IPPITSU紹介HP

<http://www.ice.gunma-ct.ac.jp/~ushida/research/>
ブログ：

「長谷川貞夫の視覚障害とユビキタス情報バリアフリー」
<http://ubq-brl.at.webry.info/>

（題字は、^{なかのなつみ}中野奈津美・財共用品推進機構運営委員）



「人間中心デザインガイドライン」合同ワークショップ開催

倉片 憲治くらかた けんじ・独立行政法人産業技術総合研究所 アクセシブルデザイン研究グループ長

「人間中心デザインガイドライン」合同ワークショップ」と題されたワークショップ（WS）が、2011年7月6日、産業技術総合研究所 臨海副都心センターにて開催されました。

子どもや高齢者・障害者を含む幅広いユーザーにとって、安全で使いやすく設計された製品・サービスが広く普及してきています。しかし、その安全性や使いやすさの程度は製品によってまちまちで、店頭やカタログ等で消費者がそれを確かめるのは、必ずしも容易ではありません。一方、開発したメーカーとしては、製品やサービスの特長を、消費者に正しく、かつ効果的に伝えたいところです。

このような問題意識から、人間工学に基づく製品・サービスのデザインに関わるキッズデザイン協議会・共用品推進機構・人間生活工学研究センターと、その取り組みを支援する産業技術総合研究所が、本WSにて一堂に会しました。それぞれの団体の立場から、人間中心デザイン（製品側の制約ではなく、それを使用する人間側の視点に立ったデザイン）を志向した製品の品質管理に関する活動や課題について議論し、それを効果的に普及させるための指針を見いだそうというのが、このWSの狙いです。

各団体の活動報告の中で、共用品推進機構からは星川専務理事が、アクセシブルデザインの意義とその標準化の動向について発表さ

れました。その後、日本人間工学会等、関連団体からの招待講演に続き、工業デザイナー、ビジネスプランナーらを含む各界有識者を招いてのパネルディスカッションが行われました。そこでは、

- ① 人間中心デザイン商品の特長や開発コンセプトを消費者にいかに関係するかという「カスタマー・コミュニケーション」の問題
- ② インターネットを通じたメーカーと消費者とのあいだでの商品価値の「共創」といった新しい動き
- ③ 認証制度や消費者の声を取り入れた規格作りを通して製品の安全・安心を確保する社会システムの可能性

などについて、活発な議論が交わされました。

企業等から100名近い来場者が詰めかけた本WSは、製品デザインの新しい時代の幕開けを予感させるものとなりました。高齢者・障害者に配慮することは、今や製品・サービス設計の基本的要件の一つと言えます。共用品の開発と普及に取り組んでこられた関係者の皆様に、今後もこの動向にご注目いただければと思います。



■ワークショップ会場の様子



■講演中の星川専務理事

●ニュース&トピックス

財団法人日本規格協会

JISハンドブック2011年度版 共用品・アクセシブルデザインの最新の規格が集結したハンドブック 発行

日本工業規格（JIS）の冊子を発行している財団法人日本規格協会では、毎年関係する分野のJISを1冊の本にして出版している。共用品推進機構が、事務局になって作成している規格は、「高齢者・障害者等アクセシブルデザイン」の書名のハンドブックとして6月20日に発行された。

このハンドブックは、大きく2つの分類がされている。前半が共用品（高齢者・障害者配慮設計指針）、後半が福祉用具である。昨年まで前半の高齢者・障害者配慮設計指針は、細かな分類がされていなかったが、数が増えてきたこともあり本年度から、下記の9分野に分類されている。

1. 基本規格、2. 視覚的配慮、3. 触覚的配慮、4. 聴覚的配慮、5. 包装・容器、6. 消費生活製品、7. 情報通信、8. 施設・設備、9. コミュニケーションである。

また、本年は新規として「触覚情報・触知図形の基本設計方法」（JIS S 0052）が加わり、改訂された規格3種が掲載されているので是非、一読をおすすめする。

JIS ハンドブック 38 高齢者・障害者等 アクセシブルデザイン 2011

編集・発行：日本規格協会

定価：7,600円（税別）



●ニュース&トピックス

共用品推進機構

ISO（国際標準化機構）の最近の動向について

ISO/IECガイド71（高齢者及び障害のある人々のニーズに対応した規格作成配慮指針）改訂の合同専門諮問グループ（JTAG）の第1回会議が2011年9月26～28日、スイス・ジュネーブで開催される予定である。このグループは2010年5月ISOのCOPOLCO（消費者政策委員会）総会でのCEN/CENELECによる改訂の提案を受けて設立されたもので、議長は跡見学園女子大学の宮崎正浩教授が務めており、日本代表の専門委員として共用品推進機構の星川専務理事と日本点字図書館の田中理事長が参加している。またISO/TC159（ISO専門委員会 人間工学）やISO/TC173（ISO専門委員会 福祉用具）等の障害とアクセシビリティの問題に強く関与しているISO専門委員会からも専門委員が参加している。この会議では事前に提出された専門委員からのガイド71改訂に対する意見（1. 改訂のスコップ [適用範囲]、2. アクセシビリティ関連文書との関係、3. ガイド71の影響力とそれを更に高めるためには、4. 具体的な改訂箇所）について討議する予定である。

またISO/TC173/SC7（ISO専門委員会 福祉用具、分科委員会 アクセシブルデザイン）においては6月3日に登録されたNP（新業務項目提案）、「点字表示 第1部：原則」と「アクセシブル会議」を検討するためのワーキンググループ設立とそのグループの議長承認の投票が行われており、9月中旬に終了する予定である。

まつおかこういち
（松岡光一）

「共用品という思想（その4：共用品を創るための5つの要素〔その3〕）」

後藤芳一（財共用品推進機構運営委員、大阪大学大学院工学研究科教授・日本福祉大学客員教授）

共用^{③⑥⑩⑪⑬⑭⑮⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿}（小さい添え字①～⑧）は、同様の用語が本講の第1～68講に既出であることを示す）の商品やサービス^{③⑥⑩⑪⑬⑭⑮⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿}を創り広めるための5つの要素のうち、今回は「共有する」の続きと「続ける」をめぐるポイントを考える。

5. 共有する（要素4（その2））

(3) 自己表現の機会でもなくとも取り組める

共用品への取組みを普及（例：標準化）させることと、共用化を個別企業の差別化のために用いることや、発案者（例：デザイナー^{④⑧⑨⑫⑬⑭⑮⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿}）個人の名を残すことは、相容れないことが多い。それを前提としても取り組むことができるという動機を持てる必要がある。

(4) 中心的な推進機関の存在

情報を集約と発信、進む方向を調整して共有する機能が必要である。ほかの組織や個人（例：企業、業界団体^{⑩⑪⑬⑭⑮⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿}、利用者^{①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑬⑭⑮⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿}、利用者団体、行政）それには恒常的な組織が必要であり、共用品推進機構がその役割を担っている。

(5) 標準化への取組み

利用者の利便のためには、提供方法が共通であることが求められる。仕様の共通化には業界横断的な標準化や工業標準化（JISやISO）^{②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑬⑭⑮⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿}が有効である。共用品にとってこれらの手法は、性能を競う分野よりなじみやすい。

6. 続ける（要素5）

長い期間続けることで普及が進み、より優れた共用品の利用が可能になる。それには、それに合わせた適切な取組みの体制や心構えが必要になる。

(1) 企業などの組織の価値観との整合性

開発と供給を持続するには、企業が無理なく取り組める必要がある。従来の取組みの課題（例：狭い経済原理）を改めることと、それを企業活動に織り込むこと（例：共用対応が企業価値

値を高めることを理解）の両方が必要になる。

(2) 変え続ける

ある時点で不便さ^{①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑬⑭⑮⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿}対応を満たした場合でも、社会環境^{⑩⑪⑬⑭⑮⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿}、生活習慣、利用者意識などが変わると、要求水準が上がったり、新しいニーズが生じることがある。変え続ける意識が必要である。

(3) リーダーシップと牽引力

運動が時代を超えて受け継がれていく必要がある。長い期間の検証に耐えるよう堅牢な理念に磨き続けていくことや、広い関係者の動機付けが必要であり、それには個人のカリスマではなく、理念や路線で主導するリーダーシップが必要である。

(4) 組織を動かすリーダーシップ

課題を指摘して啓発する必要はあるが、批判的に「声をあげる」でとどまるのでは不足である。取組みの主役になるのは企業であり、それを外から批判するだけでなく、内側から動かせる論理としくみを提示できる必要がある。

(5) 構成員の意識

課題を指摘して、あとは専門家や行政に委ねるのでは不足である。不便さなどに最初に気づいたひとは、それに接する位置にいたなどの、何かの必然がある。気づいた場合には、自分で解き切るといふ心構えを持ちたい。

(6) 中心的組織の運営方法

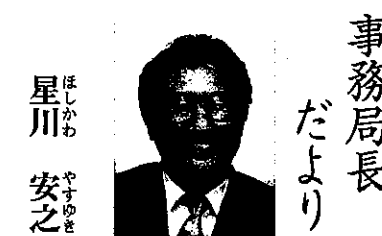
中心的な組織を維持・運営していくには、経営資源（例：財源）が必要である。それを確保するためのしくみと、それを動かす求心力が必要である。それは自然にできるものではなく、計画して構築する必要がある。

(7) 自らが進歩すること

普及が進むにつれて、さらに深い要請に応える必要が生じる。それには、共用品の普及に取り組む個人や企業自身が、技術の上でも意識の上でも、自らを進歩させ続ける必要がある。

（本稿の表現は、後藤芳一・星川安之「共用品という思想」[岩波書店]から引用した）

共用品の開発に必要な忍耐とコミュニケーション力 再度学生から学ぶ



星川 安之

事務局 長 だより

☆…本誌「キーワードで考える共用品講座」筆者の後藤芳一さんの講座（大阪大学・早稲田大学）にゲストで呼んでいただき、共用品・共用サービスの立ち上げから今までを話させていただいた。どちらも2日間のコース。初日は後藤さんが共用品推進の枠組みと社会的な位置づけを話し、2日目は私がE&C、共用品推進機構が実践してきたことを話した。それぞれ、2日目を終わってから提出するレポートは、「共用品開発に向いている人」という題とし、早稲田大学は当日、大阪大学は3日以内に提出してもらった。まずは、当日提出の早稲田大学の学生のレポートから、抜粋して紹介する。

「どうすれば、より多くの人日本人の和を尊ぶ心を持ってよりよい社会を構成できるようになるか？という問いかけを絶えず行える人」、「柔軟な発想力と分析力、そして思いつきを形にし、的確に人に伝える表現力を持つ人」、「人の意見を尊重できる人、一つのことを粘り強く続

けていける人」、「弱者の自尊心に気づける人」、更には、「人の意見を聞く人、人との関わりが多い人、味方が多い人、人の考えを把握しようとする人、他人と行動を共にできる人、論理的な思考ができる人、抽象的に物事を見ることができ人、実行力のある人、変化を楽しめる人」。

圧巻は、「自分の思考のバイアスを知り、想像における主観と客観のマネジメントができる人」。

大阪大学生のレポートは、早稲田大学の当日提出と異なり、向いている人の条件と共にその理由が分析され書かれていた。最初の提出者は、共用品開発に向いている人の条件を下記2つあげた。

1つは「忍耐強いこと」、これは、利益に直結しないと周囲に思われ、なかなか簡単には理解が得られないため、時には相手のペースに合わせなければならないことがある」とその理由をのべている。そして結果、共用品にもしなくても次につなげられる「過程」を学ぶ力、すなわ

ち忍耐力が重要としている。

もう一つは「コミュニケーション能力があること」と書かれていた。理由として、「聞くことは使用者の声を正しく理解するために、そして話す能力は、廻りの関係者を動かしていく上で重要な要素である」と結んでいる。他にも紹介したいレポートばかりであった。今回の大阪大学、早稲田大学の学生のレポートは、私にとってこのうえない大きく貴重な贈り物であった。

☆…がむしゃらに、後ろを振り返らないで行ってきた「共用品」の普及活動を、若い世代がどう感じ、それに加え、今後何が必要かを自分の言葉で書いてくれていることに感動を覚えた。気づく、動く、作る、共有する、を実践してきた共用品。次は、「続ける」の課題に取り組む時期にきていると実感した。

(★)

共用品通信

【トピックス】

- 「視覚障害者不便さ調査成果報告書」頒布開始
HP「報告書オーダーフォーム」より申込
http://www.kyoyohin.org/05_info/05020000_houkoku_order.php
頒布価格1,000円（税込）送料はご負担ください。
- 「多機能トイレ用自動ドア安全ガイドライン」策定
2011年7月1日付で制定され、来年の7月1日以降に新規に設置される多機能トイレ用自動ドアに適用される予定。（全国自動ドア協会）

【会議】

- 第1回アクセシブルデザイン本委員会（7月22日）
- 第1回TC173/SC7国内点字表示・触知案内WG（8月3日）
- 第1回ISO/IECガイド71・アクセシブルミーティングWG（8月11日）
- 第1回AD報知光委員会（9月7日）

【講義・講演】

- 大阪大学「共用品という思想」講義（後藤芳一氏、星

川、8月10日）

- 早稲田大学「共用品という思想」講義（後藤芳一氏、星川、8月12日）
- 国立台湾大学、財金属工業研究開発センターで講演（星川、台湾にて8月24日～25日）
- 日本福祉大学/スクーリング（星川、森川、9月10日）

【インターンシップ】

- 跡見学園女子大学 学生1名インターンシップ（9月5日～9月16日）

<読者の皆様へのお願い>

「共用品通信 情報アラカルト」欄では新製品・新サービス、セミナー・講演・展示会、モニター募集など、個人・法人賛助会員の皆様からのお知らせも掲載致します。事務局「インクル編集担当宛て」に、ニュースリリース、イベント案内などの情報をお寄せください。Eメールも歓迎です。

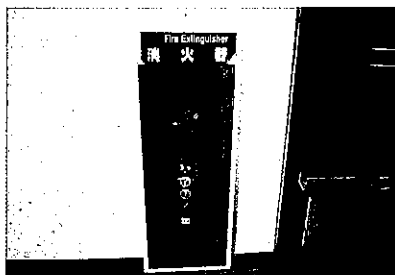


日本福祉大学 障害学生支援センター

支援を必要とする学生とそれを支える学生をサポート



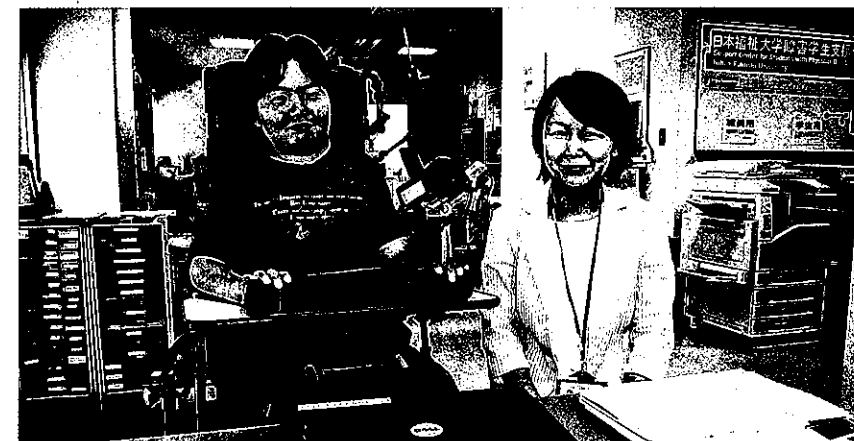
■エレベータ棟
構内の建物を移動するために使用する。



■学内の消火器は通路に置かず、柱の中に埋め込んでいる

■日本福祉大学
▽「ふくし」の総合大学をめざし、「健康・医療」(いのち)「福祉・経済」(くらし)、「教育・発達」(いきがい)の3つの領域の発展充実に努める。
▽問合せ先：日本福祉大学 障害学生支援センター
TEL 0569-87-2432
FAX 0569-87-2376
support-c@ml.n.fukushi.ac.jp
▽ウェブサイト
<http://www.n.fukushi.ac.jp/shiencenter/index.htm>

福祉を学ぶために全国各地から学生が集まる日本福祉大学。2011年5月時点で、全学生12,794名の



■同センター 福田由紀子氏(右) 社会福祉学科2年の石田直也君(左)は電動車いすを使用している。試験の際はパソコン(word使用)で回答し、時間は30分間の延長が認められている。

うち障害のある学生は250名だ。同大学障害学生支援センターでは、なんらかの支援が必要な障害のある学生(障害学生)とそれを支援する学生(サポート学生)の活動をサポートしている。

障害のある学生が大学進学を考える場合、自分も講義を受けられるのか、果たして授業についていけるのかと、心配なことも多いだろう。センターのウェブサイトでは、細かく項目が分けられ、障害学生への配慮の内容をはじめ、試験時間の延長などについても詳細な情報提供を行い、一部はビデオでの紹介もある。

要求されるコーディネータ力

同大学では、障害学生自らが自分に必要な支援を確保することが基本。自分がどんな学生生活を送

りたいか、それを実現させるために必要な支援を選択し、その支援で自分をサポートする学生を見つける。また、教員と受講上必要な支援や試験方法についても打合せを行う。「自分にできること・できないことを正確に伝え、サポート学生を探し、大学生活を自分の力でコーディネートする力が必要です」と福田氏。大学在学中のこの「トレーニング」によって培われるコーディネート力は、社会人になった時に本当の力を発揮する。一方で、サポート学生にとっても学ぶことは多い。センターではガイドブックを作成し、サポート学生と障害学生とが対等な関係を作れるよう、基本的なルールやマナーも伝えている。

(金丸淳子)

アクセシブルデザインの総合情報誌

インクル 第74号

2011(平成23)年9月25日発行
"Incl." vol.12 no.74
©The Accessible Design Foundation of Japan
(The Kyoyo-Hin Foundation), 2011
隔月刊、奇数月に発行
一般頒価 1部1000円
(但し、個人・法人賛助会員については、購読料は年会費の中に含まれています)

※視覚に障害のある方など、墨字版がご利用できない方にはPDFファイルのCD-Rを提供しています。必要のある方は、事務局までお申し出ください。

編集・発行 財団法人推進機構
郵便番号 101-0064
東京都千代田区猿樂町2-5-4 OGAビル2F
電話：03-5280-0020
ファクス：03-5280-2373
Eメール：jimukyoku@kyoyohin.org
ホームページURL：http://kyoyohin.org/

発行人 鴨志田厚子
事務局 星川 安之
森川 美和
金丸 淳子
水野由紀子
高橋 裕子
松岡 光一

小豆沢光代
執筆・協力 伊名田利秀
(五十音順) 倉片 憲治
後藤 芳一
酒井 光彦
長谷川貞夫
山本百合子

印刷・製本 ベスト・イーグル(株)
サンパートナーズ(株)

本誌の全部または一部を視覚障害者やこのままの形では利用できない方々のために、非営利の目的で点訳、音訳、拡大複写することを承認いたします。その場合は、財団法人推進機構までご連絡ください。上記以外の目的で、無断で複写複製することは著作権者の権利侵害になります。